

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

鳥海山の歴史 イザベラ・L・バード

はじめに

今年度の「名誉館長館話」はコロナ禍の関係で夏に1回、秋に2回しか無かった。鳥海山に関する2回と、先覚としては問題もあろうが、英国女性の秋田旅行についての感想や論及について扱った1回なので、例年の如く記述した。

鳥海山の歴史

鳥海山は羽後の地で仰ぐと比類なき山容である。このことは秋田が「北の海みち」を受けて、古代日本の東北の要港としての役割を果たしていた時から不変の状況である。「北の海みち」について具体的な史記は、斉明朝に阿倍引田臣比羅夫が大陸の肅慎国と表記される勢力と対立した『日本書紀』などの史料に認められるが、この時期比羅夫は「越国守」として、齋田・淳代・津軽の三郡を建てたのであるが、古典に忠実な本居宣長でさえ、比羅夫が3回も続けて東北に来たというのは、1回北行したのを3回に引き伸したのでであると受け止めたように、近代以後の研究者も認めることはなかったが、東北に早くから名馬がいて、天平年代になって律令国家体制が安定的に整うと、出羽国から5年に5匹、翌6年陸奥国から4匹の名馬が朝廷に献上されたことが「正倉院文書」に記録されるようになるのは、西南日本に中国や朝鮮から伝来した平凡な馬とは異なり「北の海みち」により蒙古などの騎馬民族地方から伝わったものに違いない。当然外来の人々も鳥海の麗姿を視たのである。

神亀4年(727)の第1回渤海使から、天平18年(746)の渤海人・鉄利人の1千百余人の多勢の民衆が帰化を求めて来航したのを出羽に安置した後帰国させたような出来事でも滞在中の民衆は日々この麗山を望見したことであろう。宝亀10年

(779)の渤海人・鉄利人359名が帰化を求めて来航した際にも望見したに違いない。延暦5年(786)渤海の使者65人が漂着と称し出羽に来航した際にもまた鳥海を仰ぎたいと考えた来航経験者が含まれている可能性も高い。

実はこの名山が神の山として史籍に登場するのは、『続日本後紀』の承和7年(840)7月26日条の「出羽国飽海郡正五位下勲五等大物忌神に従四位下を授け奉り、兼ねて神封二戸を宛つ」という詔文と、併せて記される宣命体の和文の詔である。

その詔の趣旨は「遣唐使第二舶の人員が廻り来て『去年八月南方の賊の境域に漂落し戦った際、相手は多勢当方は無勢の甚だしい差で敵対できない実相であったのに、急に情勢が変り勝つことができたのは、神助があったからであろう』とのことである。これは去年出羽国の言上にあった『大神の雲中十日間戦声を作した後に石の兵器を降らした月日と遣唐使の戦いの月日とが符合していて大神の稜威が遠くにまで及んだと考え驚異的恵みに歓喜し奉る。よって神位を上げ封戸を奉る』』というものであった。

その承和6年10月17日の出羽国言上は、「去る八月二十九日田川郡司の報告によると、今月三日から霖雨が続き郡の西浜に自然隕石があり、鏃に似、或は鏃に似、鋭は西に向き、莖は東を向いている。石器は太政官の外記局に進上された」という内容であった。遣唐使の船の戦の方向は西である。そして鳥海山の本来の恐ろしさは噴火である。

鳥海は、現代的に言えば尾瀬の湿地高原の燧ヶ岳の2346メートルに次ぐ2236メートルで、奥羽地方で2番目の高峰であるが、東北・北陸・関東の境界山地に存在する燧ヶ岳は、鳥海山のように

*秋田県立博物館

独自のすっきりした高峰の感じはしない。やはり平地から遠望もできる鳥海山は東北一の名峯である。当然他の名峯と同じように信仰が生まれることになる。

そして、国史に登場するや、奥羽に神威を示したということよりも、日本の古代において極めて卓越した外交的意味を持つ遣唐使に神恩を示したというのである。こうなると自然的意味においては、東北の名山であっても、信仰では国家全体の崇敬対象ということになる。

そして承和の国史登場から30年が経過した貞観13年4月8日の噴火は激しかった。『三代実録』5月16日の記述によると、「山上に火が見え、土石を焼き、雷鳴の如き響きがあり、山から流れ出る川も泥水が溢れ、色は青黒く臭気充満し、死魚が多く浮かび、大蛇も2匹流れ出、川のはとりの苗代は流損し、草木も腐って生えない状態になった」という。

弘仁年中にもこのような噴火があり、その後間もなく兵乱があったので、不安は強まったのである。貞観17年(875)渡嶋の荒狄が80艘で来寇したのち秋田城下に大戦乱が起り城は攻め落とされるという、出羽では珍しい大変事になったということも考え併せられた。鳥海山の神性は変事毎に増して来る。

貞観15年4月5日にも、「出羽国従三位勳五等大物忌神正三位を授く」ということがあったのであるが、元慶2年(878)の「元慶の乱」の際にも終戦後の元慶4年(880)2月27日にも正三位勳三等大物忌神に従二位を授けたことがあった。

幕末から明治初年に有名な学者が鳥海山の神「大物忌神」が、『日本書紀』天武天皇4年4月条の「大忌神」と同じ神だとし、人々に信じられたが、この学者鈴木重胤は平田篤胤の歿後の門人として著名であるが、彼は平田家の後継である鎌胤から破門されるようなこともあった人物である。信じ難い説である。

水戸学の著名学者栗田寛博士は「宇迦之御霊神」であるとしているが、この神だとすると伊勢神宮の外宮の神と同じなる。確かに神宮では現代も祭事に奉仕する「物忌」の称が存在するが、最年少は4歳で7歳8歳など小学生段階の少女で、

祭神などではない。

火山活動で恐れられる厳しい神格で、遣唐使も護られる強力さが頼られる神威を持つ、信者は自身の邪悪を忌み謹んで信仰すべき神であることから、この神名を奉ることになったものと解される。

山名の「鳥海山」は古代史料には記録がない。中世の「暦応5年」の年号を伴う吹浦大物忌神社の鰐口に記された「鳥海山」の称が、現在認められている最古の存在である。この年号は北朝の年号で1342年に当たる。

イザベラ・L・バード

バードは勿論秋田人としての秋田の先覚ではない。だが近代国家として外国交流の方途を開いた日本国秋田県について、極めて明瞭な見解を示したヨーロッパ人の女性であり、その旅行記を遺した先覚者である。一人しか話題に出来ない今年に採り挙げた所以である。

明治11年(1878)7月17日に山形との県境を馬の背で越え吾が秋田県に入った。解するに彼女は北海道に赴くべく日本北部を遊することになったのであろう。更に私見を加えると、北海道の「アイヌ」の人々に関心があったのだと考えられる。多分アイヌの人々が西洋人と同祖であるというような当時あった見解と関連した行動だったのだと考える。『日本奥地紀行』と題された記録が資料である。

前夜は山形県の金山で、その地の戸長と夜遅くまで話しこんだ彼女は、1831年生まれの英国女性で47歳という熟年の旅人であった。彼女の旅は西洋人女性などに接することの未経験な人々に、各地共通で興味を持たれ、物見高い群衆に囲まれる現象が生まれた。その度に本人は困惑していた。

金山の戸長はその地らしい几帳面さで彼女に触れないように、地区に「触れ」を事前に出して規制して呉れたので、その親切にも感じながら会談していたのである。峠を越えるとき前日食した鶏肉の美味に得た満足感を思い起していたという。

秋田県に入って、長い着物をその中にまくりこんだズボンをはく女性の服装などに注目して宿は泊り心地のよい院内に泊った。だが直ぐに秋田人

の温かくて人見知りしない好奇の目で覗かれることになり閉口していた。「もんぺ」は山形県でもあったと思うが、私が昭和18年に初めて西日本に旅した時の記憶に従うと、岡山などの中国地方は勿論、関東や中部地方でも東北のように「もんぺ」や「たちつけ」を用いてはいなかった。上院内でも下院内でも脚気が流行していて、1500人の住民中7ヶ月の間に100人の死者が出て、久保田の医学校から2人の医師が応援に来ているのを見た」と記している。

ユソワ（湯沢）での昼食は「貧弱な」豆腐料理で、（当時は豆腐料理は上級であったらしいが、肉食の西洋人には「貧弱」な味わいしかなかったのであろう。）見せ物でも観るようになり、ポカンと口をあけて何時間も動かない何百人もの群衆に困惑した。果ては、隣家の屋根に登る者まで続出し、屋根が抜けて50人ばかりが投げ出され、4人の警官がやって来て「旅券提示」を求められたが、文字は読めず、旅行目的を聞いて帰った。

やがて横手に入るが、そこでは人口1万で木綿の大きな商取引が行われているのに、街は見映えがせず、悪臭がありじめじめしていたと書いている。更に毎週木曜日に雄牛を殺すと聞いていたので、夕食にはビフテキを食べ、1切れは携行しようと心ぐんで来たのに、全部売り切れており、米飯と豆腐だけの食事になった。山形で求めて来た練乳も悪くなって捨てるほかなかったと悔やみ言を並べているが、その横手で望見した鳥海山は、「雪の丸屋根」をのぞかせる景色で良かったと述べている。

雄物川の橋が流失していたために2隻の舟でロクゴー（六郷）に向った。六郷は人口5千で立派な神社や寺院があった。だが町は屋並みはみすぼらしかった。この町では葬式と美人の未亡人を見、好意的に描写している。このことがあったからか、オーマゴリ（大曲）で大きな甕棺が造られていることも書いている。

人力車で六郷を出、院内で会った若い医師に出会い、秋田での招待を受け、久保田（秋田のことをバードは久保田と記している。）には西洋料理もあることを聞き期待感を抱いた。

また、人力車夫が裸で走っていたので警官に注

意され土下座して謝罪しているのを、彼女が「こんな情ない光景を見たことがない」と嘆いているのを見ると、前身が上級武士と足軽であったというような事情があったのかもしれないが、西洋人の彼女には情ない状況だったのであろう。

ジンゴージ（神宮寺）で彼女は疲れを強く感じ宿泊することにする。宿は見つかったが悪臭の室であり、群衆に観られ、警官が出動し追い払う。神宮寺からは雄物川9時間の舟旅となり久保田に到着する。

県都は人口が3万6千の純日本風な魅力的町であり、「太平山」という立派な山と、肥沃な平野があり、食事も満足を得た。気持よい宿の二階の室で、3日間ビフテキ・カレー・きゅうり・外国製の塩と辛子の料理など、おいしさに眼を生き生きとさせた」と記述している。

しかし道路が悪く、人力車では各方向に3マイルしか行けないが、商売は活発で、黄と黒や青と黒の絹織物が産出すると特記。黄八丈のことならん。

外国人は1人も住んでいないが、城下町に見られる寂れた沈滞は無く、どの町よりも好ましく繁栄していると記している。山形市のことを人口2万1千人で秋田より1万5千人も少ないと比較記述している。

県南で会った若い医師の関係だろう、当局からの許可もあり訪ねた病院のことも記しているが、秋田で一番立派な建物は師範学校だと記している。病院の医師は院長・副院長の他に6人の医師と50人の医学生がおり、一階は寄宿舎と100人の病室で、1室の入院患者は10人が限度であると記している。師範学校はこの年の4月17日に「太平学校」が「秋田県師範学校」と改称され、しかも旧校舎が火災となり、4月に改築竣工したばかりであったので、彼女の眼にも立派さが明白だったのであろうが、校長青木当松・教頭根岸シュデカネ（秀兼）の対応だったが、校長の英語は彼女の日本語程度、教頭の奇怪な英語は通訳なしでは解し得なかったという。彼女は伊藤という青年通訳と旅をしていたのである。（尚菊地昭男『秋田の英語教育史談』によると、校長の当松は「保」が正しいという。）

久保田では洪水になりそうな天候のために数日滞在となり、4歳の神童をみたり、22歳と17歳の男女の結婚式に招かれたり、土崎シンマイ（神明）の祭で大道芸や見せ物を見、港に他所から2万2千人も集まり、3万2千人の群衆がいたのに、25人の警官で充分秩序が保たれているのに驚いて、秋田の警官を「知的な士族」と位置づけた上で、日本の2万3千3百人の警官は、東京に5千6百人・京都1千4人・大阪8百15人という配置で、30パーセントが眼鏡をかけているということまで書いたりしている。

久保田を出て鹿渡までの間に男鹿の本山や真山を見、大館まで泥道を歩いたりして、「北日本を旅する人は身体の丈夫な人に限る」と嘆いたりする。途中31戸の切石から小繋まで2里半を4時間の舟漕ぎの旅を体験したこと、川はヨネツルガワ（米代川）であること、ツグリコ（綴子）の駅停

は汚すぎて雨の街路に腰をおろしたことなどを述べている。

人口8千人の大館はみすぼらしく家がたてこみ、大雨で足どめの客で満員。5カ所も浅瀬を越えて矢立峠を目指し白沢まで着いたら通行止めで、警察の許可なしに外国人は泊められないと言われたが、1部屋明けてもらおう。蚤と悪臭を除けば、日本の田舎は世界のどこの田舎よりも優秀だと記し、秋田県最後の夜を過ごす。明治初期の秋田文化理解者第1号の外人女性かもしれない。

〈追記〉

明治初期の来秋居住の第1号西洋女性と思われるのは、明治17年5月27日横浜発31日土崎港着で来住のローラ・ガルスト23歳で、『回想録』を残す。21年7月土崎港発で鶴岡に転住した。